

最初に、本書の発刊に寄せた関係者のご努力に感謝の意をささげたい。

第二次大戦後も戦争は止むことなく続き、それは必ず空からの攻撃を伴っていた。むしろ空からの攻撃から戦争は始まる、といっても過言ではない。その際都市爆撃と村落襲撃は、空からの攻撃の付随事項として、現今ほとんど公認されかけている。これは世界平和にとつてたいへん危険な兆候であり、由々しき問題なのである。空から非戦闘員を攻撃することは、正当な戦争行為といえるのだろうか、と問えば、東京大空襲に際して米軍側は、爆撃地域の東京下町は軍需工業と関係した小工場の密集地域である、として爆撃の正当性を述べているが、そのことは軍需工場と関係したものでなければ、非戦闘員の居住区域は爆撃してはならないことを語っている。本当は、多少の軍事との関係の疑われる場所でも、非戦闘員の多数居住する地域は爆撃してはならないというのが、国際法規の精神的な原則なのである（参照——戦時における文民の保護に関するジュネーブ条約・ジェノサイド条約）。空襲による非戦闘員の殺害は、合法性を持った戦闘行為ではなく、あつてはならない犯罪行為と考えるべきである。けれども戦争が起されれば空襲があり、民間人が被害を受け、非戦闘員から死者が出るのは当然であるという考え方が通説になり、この通説が大手を振って世界を歩いている。私たちは、この考え方を変えさせなければならぬ。この考え方の不当性を世界に強く訴えなければならぬ。この時本書の発刊を見たのは、まことに時宜を得た企画の実現であり、世界平和のための新しい道標が生まれたことに当たるのである。

二十世紀の航空機の著しい発達は、戦争の様相を一変させてしまった。第二次大戦の太平洋における戦争も、航空戦から始まった。ハワイ空襲を脇に置いてフィリッピン戦に例をとれば、初日フィリッピン上空に現れた日本機は七百を数えたと、マッカーサー回想記は記している。延べ機数であろうが、圧倒的優勢な日本軍航空機がフィリッピン上空を制圧した状況が、想像できる。日本が緒戦、米英軍を駆逐して南東アジア全域を占領したのも、航空戦に勝利して制空権を得た結果である。日中戦争においても、航空戦が重要な鍵を握っていた。昭和十二年、盧溝橋事件の発生をみるや、日本軍は時を置かず南京、南昌、天津などの中国諸都市を爆撃した。この年ドイツ空軍のスペイン都市ゲルニカの爆撃が全世界の非難を浴びたことで蔭に隠されたようになってるが、世界で初めて組織的、継続的に都市爆撃をおこなったのは、中国に対する日本軍航空隊

なのである。とりわけ戦争が進んでから行われた重慶爆撃は、惨烈を極めて世界の非難的になっていった。日本空軍は、国際法を無視して都市爆撃をつづけ、中国人を虐殺していたのであり、私たちは空襲の被害者だけに止まらず、加害者でもあることも忘れてはならない。

太平洋戦争の緒戦、日本空軍の優勢下に戦局が進んだことは前記したが、この日本軍優勢に一撃を与えるべく、米軍は航空母艦に大型爆撃機を積んで日本近海に迫って発進させ、日本本土爆撃後、中国の、日本軍占領地外の飛行場に着陸させるという、当時としては奇想の戦術を採用実行した。昭和十七年四月十八日、二隻の空母が日本海岸線から千三百キロの地点に近づき、うち一隻のホーネット号から十六機の重爆撃機が飛び立った。指揮官はジェームス・H・ドーリットル中佐であり、その名をとってドーリットル隊と呼ばれている。

その日私は、今流に言えば十三歳の中学二年生で、東京北千住に住み、路面電車を利用して通学していて、帰校時の電車が千住大橋に掛かった時、北側窓に映る隅田川上流にただならぬ黒煙が、盛り上がるように空に立ち上っているのが眼に入った。「あれは尾久のアサヒ電化だぞ」と乗客の一人が工場名を叫んだ時、空襲警報の断続するサイレン音が窓外から車内に流れ込んできた。騒然とした空気が車内を包んだ。ほどなく電車は北千住終点に着いた。電車を降りたが、私は脚が震えていて良く歩けなかった。私には、戦争は新聞紙上のできごとであり、戦線は遠い遙かな南にあり、それはいつも勇壮なドラマで、勝利の報道に溢れていた。戦争は、美しい夢のような物語だった。ところが、その戦争がいきなり東京上空に現れたのだ。形容できない恐怖が、私を掴んでいた。

三年後、私は同じ道路の上にあった。私は海軍の少年飛行兵に志願して岡崎の航空隊に入隊、六ヶ月の教育を終えて神奈川県厚木基地に転勤の途上、東京の生家に立ち寄ろうとして、東京駅から山手線に乗り上野駅にきて、常磐線が故障で動かないと知らされ路面電車に乗ろうと駅の正面に出たのである。時に昭和二十年三月十一日の朝、東京大空襲の翌日である。正面出口から数歩出て、私は不意に立ちすくんだ。眼前に広がる光景に茫然としたのである。そこに私の知っている街並みがあった。一望、建物が消えて白い原に変わった向うに浅草松屋アパートが汽船のように浮かんでいた。よく晴れた日で、ところどころ建物の基底だけを残した白っぽい原は、春光を反射させてきらきら輝いていた。だが、その光景は私の経験を超えていて、何が起きたのか理解できなかった。空襲の焼け跡にしては、焼けただけだれた建物がなく、綺麗さっぱり何もない。人影も見えないのだ。私は悪い夢の中にいるような気持ちで、路面電車も来ない街の道路を、とほとと北千住に向かって歩いていった。前日その街は、新型焼夷弾ナバームのおびただしい投下と無類の高熱炎焼の結果、炎の嵐が生まれ、人々は炎

の嵐に追われ、追い詰められ、十万の無辜の民が亡くなり、街も消えてしまったとは、その時の私は知るよしもなかった。それから半年近く厚木飛行場にて敗戦を迎えた。その間いろいろなことがあった。とりわけ、外出して会った戦闘機の搭乗員から、四千メートル上空の空中戦の恐怖を聞いたのは忘れがたい。彼は私の先輩にあたる、二十歳前後の若い下士官だったが、上空の戦いは勇壮でもなく、いつも死とすれすれに面していて恐怖の連続なのだ、四千メートル上空は網渡りより危険な見えない崖の上であり、一刻一刻、死がかかっている恐ろしい戦場だ、という。日本軍兵士は、死を怖れないというのは、戦争を美談にしようとする者の虚言であり、死が恐怖でない人間は存在しないことを、その時は教えられた。

それから朝鮮戦争、ベトナム戦争と戦争は続いて起きたが、航空機の進歩は、搭乗員の安全性を飛躍的に向上させる方向に向かった。戦闘機はジェット推進を採用して速度は音速を超え、爆撃機は大型化して高度と防禦兵器搭載を増し、航空機搭乗員の損耗率は戦争が起きる都度低下していった。だがそれと反対に、爆撃される側の損害率は新しい戦争の都度上昇し、とりわけ非戦闘員の死亡率は高まり続けた。都市爆撃には、される側の安全性を高める方法はなく、攻撃の側は攻撃手段を余念なく開発をつづけた。湾岸戦争以後は、この傾向は甚だしく顕著であり、巡航ミサイルは搭乗員のいない、自動運転の電子の眼を持った高速の爆弾であり、クラスター爆弾は親子爆弾の形をしていて、子ども爆弾には時限装置つきという残忍な殺人兵器であり、劣化ウラン弾は残留放射能を持つ超小型原子爆弾ともいえる兵器である。これらの兵器がアフガンスタンとイラクに雨のように降り注いだのだ。

ここで最終兵器といわれる原水爆兵器について述べれば、これは一つの街、一つの国を消滅させてしまう大量殺戮兵器である。これの運搬手段としては地球上どこにでも届く長距離ミサイルがあり、発射手段としては、姿の見えぬ海底に潜って、息をひそめている原子力潜水艦が存在する。国際機関は、この原水爆兵器を使用不能にするため廃棄し、製造を禁止する方策には手をつけることができず、かえって原水爆保有国が増加拡大する方向さえ生まれている。これが地球上の現況である。米ソ冷戦終了後二十年経った現在も、私たちは世界の戦時体制を解体することができず、原水爆戦争による破滅という悪夢を、背負いながら生きている。このことは異常な状態が、異常に長く継続していることである、といわなければならない。

これらのことを『大空襲・三一〇人詩集』は、たくさんの詩人が、まことに鋭く豊かな言葉で表現している。空襲の非道に対する世紀の告発書といえる詩集である。

戦争のない世界を作り、全世界の人々が平和に暮らす国際社会を実現することは、二十一世紀人類の最も切実な課題である。このためには、空襲の真実を全世界が知り、空襲による非戦闘員殺害がいかに残酷な犯罪であるかを、人類の共通認識に拡げることが必要である。本詩集は、その役目を果たそうとしていて、空襲という戦争の現実を表現提出することで、平和への道を作ろうとしている。たくさんの人が、この書を手にとって欲しい、と思う。空襲は一度と体験したくない事件だが、そのためには、私たちが空襲の現実を直視しなければならない。空襲を無くし、戦争も無くすという問題は、それに触れず忘れてしまえば消えていく、というものではない。それを無くそうとして、立ち向かう者がいなければ無くなる。私たちは、平和を作る者であり、そのために戦争を作り出す側に立ち向かう者なのである。

はじめに

二〇〇九年二月九日深夜、十二時少し前に、原稿用紙を広げ、むらむらと湧き起こってくる気持ちのマグマを書きつけ始めると、時計の針は容赦なく時を刻んで、たちまち二月十日〇時三分、五分と過ぎて行く。そして〇時七分になった。あ、何としたことだ。あの焦熱地獄出現の時刻ではないか。確かに今は二月で、三月ではなく、年は二〇〇九年で、昭和の年号で通算すれば昭和八十五年だが、時間の魔に引き込まれて、一挙に六十五年の時空を越えて、一九四五年、昭和二十年三月十日午前〇時七分から午前二時三十七分の焦熱地獄、東京大空襲大虐殺の時刻に運ばれていた。

紅蓮の炎の中で、一瞬のうちに命の火を消され、たちまち顔かたちを失い、真っ黒焦げの炭化屍体の山を築いて行く二時間半の焦熱地獄！——ああ、ここから先は、とても順を追っては書けない。あの夜の十万の死者と四万を超える負傷者の靈魂が、私の拙いペンの動きを止めてしまつて先へ進ませないのだ。

今、生身のからだはアメリカ合衆国空軍B29爆撃機の大空襲大虐殺によって真っ黒な炭になつても、赤坂氷川神社の大イチョウのウロから、浜離宮庭園表門の石垣の中から、愛宕神社の石灯籠の中から、小石川後樂園の狛犬のからだから、回向院の供養碑から、青山善光寺の供養塔から、死者の魂は蘇り、十三歳になつたばかりの中学一年生に憑いて、あらためて、私を促すのだ、とぎれとぎれの、か細い声で、今までどこの誰も語っていないことを。

死者の数

人間一人の死は、数字で書けば「一」と表記するしかない。命一つは、虫でも人でも「一」に違いないが、値打ち、という点から考えると、あるいは〇以下の塵芥に過ぎないが、見方を変えれば、数え切れないほどの価値のあるものとも言えるのだ。

大本営発表の「本三月十日零時過ヨリ二時四十分ノ間B29約百三十機主力ヲ以テ帝都ニ来襲市街地ヲ盲爆セリ」と、米国発表の三百三十四機では、来襲B29の数でも三倍近くも異り、アメリカ側の資料でも、来襲三百三十四機はM・アムラインの「破滅の決定」でも、L・ギオワニテイ、F・フリード共著の「原爆投下決定」でも同数だが、死者の数は、アムラインは「八万五千名が死に、四万名が火傷をうけ、約百万名が家を失った」と書いているのに対し、ギオワニテイ、フリードは、「二六万七二七二戸の建物が消失し、死者八万三七九三名と、傷者四万九一八名」と微妙に食い違っている。後に日本人が調べたものでは、死者一〇万五九〇〇人を超えているとも、また十一万人に達する、というのもある。よくわからぬ、というのが真実なのだ。因みに早乙女勝元氏は死者八八七九三名、負傷者四〇九一八名と記しており、備考欄に死者推定十万人と書いている。これが三月十日二時間半の死傷者の数だが、東京空襲の回数も早乙女勝元氏は一九四二年四月十八日から一九四五年八月十五日まで九十九回（同一場所に二回以上来襲した七回をプラスして百六回）とも記しているが偵察来襲も加えれば百二十二回という記録もある。死者合計は十万六二九八人であると書いたが、発掘した遺骸の頭蓋骨から死者十一万五千人以上負傷者十五万人、尚墨田川から東京湾へ流れ込んだ死者は数えられないと推定している。

戦争による死者の数は、「南京大虐殺三十万」とか、ナチスドイツの「ユダヤ人虐殺六百万」なども生れて、時間の経過と共に定説化して行く過程は、死者の側に立てば、「東京大虐殺十万人」では成仏出来ず、やがて脹れ上がってくるのは死者たちの怨霊の声でもあって、「一体あの黒焦げ屍体を誰が数えて歩いたんだ！」という声にもなるのだ。やがて日本でも、東京大虐殺犠牲者の怨霊が、戦後数十年経つてから生れたアメリカ在住の若いアイリス・チャンのような女性に乗り移つて、「東京大虐殺二十万（あるいは三十万）」という本を書かせ、カーチス・E・ルメイを悪魔として告発するかもしれない。ところが、昭和三十九年十二月七日、埼玉県の航空自衛隊入間基地で、佐藤栄作総理大臣をトップにいたたく日本政府が、東京大空襲無差別大虐殺企画司令官の元米軍第二〇航空隊司令官、カーチス・E・ルメイ少将に、勲一等旭日大綬章を、自衛隊空軍育成に協力したからという理由で航空自衛隊浦幕隊長から手渡したのである。

この問題は死者の靈魂の問題ではあるが、生命を失う現場に居合わせた生者たちが、たとえばシンガポールのロコール運河の橋の上に並べられた五つの中国人の生首を見せしめに晒した日本に対し絶対許すはずが無く、死者の生首は五つから五十、五百、五千と脹らんで行くのは当然で、さてこそ日本在住の中国人評論家が、日本人は数ばかり問題にするけれど、問題の本質は、数にあるんじゃない、そういう数を生み出した人間の行為、——加害者の行為を言ってるのだ、というのが、大いに説得力のある考え方であると言っている。

ただ霊魂が行き場を失って、さ迷い続けるのは、南京にもシンガポールにもその他の国にも、被害者が受けた苦しみを、マヌカンなどで復元してまで生者にその被害を訴える記念館、博物館があるのに、東京大空襲大虐殺の現場には、何もなく、「東京大空襲を記録する会」という民間人の手で、ようやく二〇〇二年三月九日に、江東区北砂に「戦争資料センター」が開館しただけであるのはかなしい。

東京から全日本に広げれば、被爆市町村は三九三に及び、死者五十六万と集計されてはいるが、五十八万という説もあり、東京同様確定していない。

そうなのだ、死者は数ではない。東京の死者は十一万五千以上でも、結局、死者は「二」なのだ。これは広島が十四万、長崎が七万四千、今次大戦による日本人死者三二〇万、更にはゲルニカの死者一六五四、重慶の死者一万二千、ドレスデンの死者三万五千、そしてロンドン、ハンブルグ……、ときりがない。

空爆を含む第二次世界大戦の死者は、小さい国でも十万単位、主要国では百万、千万単位で数えられ、加害被害の調査研究は休むことなく続けられ、死者の数字も変動するが、この六十五年間にも朝鮮、ベトナム、アフガニスタン、イラク、そして最近のイスラエルによるパレスチナ、ガザ地区空爆による千人を超える死者の数は生々しい。

すべては因果応報、大脳を悪の方向へ肥大させた同族殺しを続ける貪欲狡猾な猿の変種ヒトの絶滅寸前の悪夢の一コマと割り切る他に道はないのか。

あの音が今も聞える

魂がまたあの夜に呼び戻される。

三月九日の夜は、北風の吹きまくる寒い夜だった。十時三十分警戒警報が発令された。これは一気に長鳴きするのだ。テナアン、サイパン、グアム等マリアナ諸島から硫黄島を中継地点として本土空襲が活発になった昭和十九年の、十一月二十四日から三月九日までは、三十六回も東京は空襲されていて、中学一年生の私は、京王電鉄の千歳烏山にあった都立中学から、都電や国電を乗り継いで、友達数人と、ある時は一人で、怖いもの見たさの一心で焼跡地獄めぐりを何度も重ねていて、黒焦げ炭化屍体なども目撃していたので、次はわが身と、恐怖心すら抱かずに都内各地をうろついていたのだ。とはいえ、うろつうろつ、と高らかに唸っては十回ほど断続して鳴り響く空襲警報発令のサイレンは今も耳朶を打つのである。

すでに零時七分にB29から第一弾が投下されていたのに、その夜は十日の零時十五分にサイレンが鳴ったのだ、それからわしなく鉄琴を叩いて、「東部軍管区情報」というアナウンサーの上擦った声ラジオから流れてくる。……となれば、いくら寒くても、庭の片隅に作った半地下式の板切れで崩れてくる土をおさえただけの防空壕に、防空頭巾を被って、潜るしかない。その夜はどのくらい入っていたのだろうか。

父は私が小学五年の昭和十七年の秋から軍属として昭南特別市（シンガポールを日本が改名していた）へ行ったまま、二年半も不在であり、兄は海軍兵学校に合格して四月から江田島へ入学することになっていたのだ。世田谷四丁目の家には、満四十の母と十六の兄と十三になったばかりの私と三人が、ろくな食事もとれないままに、痩せこけたからだを寄せ合って、防空壕の中で寒さを凌いでいたのだ。

北風が電話線で悲鳴に似たメロディを奏でている真夜中の粗末な壕の中に、あの、一種独特な不気味な音が、うおん、うおん、……と流れ込んできた。恐る恐る首を出してみると、暗紫色の大きな高い夜空いっばいに、巨大な怪鳥のような飛行機が、後から後から湧き出すように超低空で通り過ぎて行くのが眼に映った。そんな低空に降りてきて四発の巨大な翼をじつくりと見せてくれたのは初めてだった。一万メートルの高空を飛んで来るといふことで、それまでは姿はもちらん爆音すら聞いたことはなかったのだ。

昭和十七年四月十八日。ドウリットル中佐指揮の、ノース・アメリカンB25十六機による編隊飛行を、小学五年になったばかりの満十歳の私は、世田谷国民学校の校庭の上空を、かなり低空で、飛び去るのを見ていたのだ。それから三年近くも経ち、小学六年になった昭和十八年頃から、次第に日本がアメリカに押され始めたことは子供心にも感じてはいたのだが――。

突然ずずん、ずずずん、……と腹の底に鈍く重い、大地を揺るがす音が響き、同時に、壕の中へざらざらと土が崩れてきて、怪鳥B29に眼は釘づけになったまま、私はそろそろと壕の外へ這い出した。気がつけば、わが家の壕からだけではなく、隣近所の家の壕からも、一人二人と地表に這い出してきた人影が黒く映り、それぞれ家の中へ消えて行ったのは、動物的直感で、今夜は、どうやら、わが家の方には敵機は来ないようだな、という図太くも、やけくそな安堵感とも呼ぶしかない奇妙な感覚の為せるワザとでも言えはいいのだろうか。

私たち母子三人は寒さも忘れ、雨戸も障子も開け放った六畳の間に、毛布で足をくるんで、口も利かずに、途絶えることのない、ぐおんぐおん、……と腹の底に響いてくる遠雷に似た怪音を耳に、もはや夜空とも言えず、かと言って昼のように、

とも形容できない明るい東の空いっぱい、連続して、超低空で、悠然と飛んで行くB29の姿を怒りも憎しみも恐怖も、何もかもすっ飛んでしまった空っぽの頭で、ただ巨大なスクリーンの映像のように受けとめているばかりだった。東京の東半分が燃えている。ほんの数キロ先のところで、何千、何万という人が死んで行く。あの炎の舌は、こちらへ延びてくるだろうか。そうなれば自分も黒焦げの屍体になっちまうだけだ。だが、多分今夜は来ないだろうな。あれこれ考えていると、それにしてもきれいなもんだねえ、と誰かの声が外から聞こえてきた。やがてB29の姿が見えなくなり、夜空を焦がした炎だけがいつまでも消えなかったが、空襲警報が解除になり、悪夢の二時間半が過ぎ去って行つた。記録によれば、午前二時三十七分であつた。

その日登校すると、発音上手な英語の野村先生と、ちよび髭の先が白くなっている老退役少尉の戸川軍事教官の焼死が伝えられた。

臉を閉じれば、それからしばらく経ってからうろついた隅田公園に、円錐形に高く屍体を積み上げて土をかぶせ、大きな線香立てから立ちのぼる煙幕のような煙の中に幾つもの巨大な塚、私の言葉で言えば、「屍体のボタ山」が、ところ狭しと林立していた風景と、東武電車の墨田公園駅が鉄骨剥き出しの巨大な醜い骸骨の形で空中に浮かんでいる姿と、常磐線の車窓から、遙か彼方の東京湾まで眺望出来るような気がするほど広がっていた焼野ヶ原が眼に映つた。

大空襲の夜から三週間経って、母と私は利根川べりの母の実家へ疎開した。疎開転入先の中学には顔の半分をケロイドで覆われた少年がいて、大学へ入れば同じ状態の女子学生も眼にした。勤務先の永代橋の職場には親兄弟を三月十日に亡くした同僚や若者に何人も遇つた。

旧制中学二年生になつた私を待っていたのは勤労働員だった。九十九里浜へ米軍が上陸する予定だからと、身長の二倍の軍需物資を隠匿する穴を、陸軍の将兵指揮の下に空襲下にも作業を続行したが、旧制中学二、三年生のうち、ついにグラマンの機銃掃射による犠牲者が出た。

東京大空襲の往復に撒き散らした降伏勧告のビラには、ハリ・エス・ツルーマンと印刷してあつて、軍部にだまされているから早く降伏するようにと呼びかけていた。牛馬の乗る有蓋貨物列車で十五分、穴掘りの山へ通ううちに、幾度か超低空のグラマンの機銃掃射を受けた時、飛行帽を被つてはいたが、子供みたいな顔の若者が操縦しているのを見た。私たちは戦場にいたのだ。

四月の一夜、耳をつんざくような轟音とともに、真っ赤に焼けた空から巨大火球となつて利根川べりの田の中に墜落したB29と黒焦げ屍体の一つに群がり、手に竹や篠の刃を屍体に突き刺しながら、これが歯か、これが眼かと半分悲鳴のような声を発しながら取り囲んでいる村の男衆のうしろから首を突き出して恐怖と残酷な地獄絵の一員となつていた私は、もはや何も感じなくなつていたのも当然だった。こうした日々の重なるの果てに、あの八月十五日が来て、戦争に敗けたことを知らされ、空襲も終つた。

画期的な『大空襲・三二〇人詩集』の発行

一昨年、『原爆詩一八一人集』を世に送つて反響を巻き起こした鈴木比佐雄氏ら編者達が、あらためて大空襲の詩の一大アンソロジーに取り組んだことに、深甚なる敬意を表したい。アンソロジー発行の直後、今度は「東京大空襲」を、と半ば無理とは思いつつも、揚言した私だったが、同時に編者達にも計画にあつたようで、しかもそれが、東京から全日本、更には世界へと広げて企画編纂が進められていて、神品芳夫氏、秋吉久紀夫氏等の手で、ドレスデン、重慶等と取り上げられた。長い間、東京大空襲詩を書き続けて来た私も参加するだけでなく、旧制中学四年の時、「新日本文学」のコンクールに入選した山田今次の焼跡の詩に衝撃を受けたことや、ディラン・トーマスがロンドン空襲の詩を幾編か書き残していることなど電話口で伝えていたが、すでに詩誌や拙詩集で、私の意のあるところを受けとめていた鈴木比佐雄氏は快く話を進めてくれたのである。

「大空襲」の詩、しかもこの一冊で死者生者を問わず三二〇人の詩人の声の共鳴を聴くことが出来るからだ。世界規模での編纂は、本アンソロジーを以つて嚆矢とする、正に画期的な事業である。

第一次世界大戦中に、リヒトフォーフェン等ドイツの飛行機編隊が、手投げ弾をぶつたり落としたりの次元から始まつた空からの爆弾焼夷弾攻撃が、僅か二十年後の第二次世界大戦には、人類絶滅を予兆させるほどの地獄を現出するとは、敵味方加害被害を越えた事態で、さてこそ、ありとあらゆる記録、記録を超えた詩（文学）が生み出されたのだ。

人の世の続く限り、あるいは続けさせたいと願う限り、記録の、詩（文学）の手を弛めてはならない。

最後になつたが、大空襲体験者二人の言葉を伝えてしめくりとする。

一人は小田実氏で、「私が八月十四日の大阪大空襲を体験しなかつたら今日の私は存在しなかつたらう」とテレビの中で述べたことである。そしてもう一人は、生涯の大部分を東京大空襲の調査、著述に捧げた早乙女勝元氏の次の言葉である。「世

界戦史上、どんなに激烈な戦闘がおこなわれたところでも、わずか二時間余の短時間に、八万人を超える兵隊が死んだという記録はない。その意味で、あの太平洋戦争下の『銃後』はまさに戦場であり、東京を中心とする大都市は『最前線』だったと私は思う。加えて青壮年男子の殆どが戦場に行っただので、死傷者の大部分が老人女性小児だったという統計上の事実として早乙女氏は示したのである。

解説3 世界から空襲・空爆の連鎖を断ち切るために

——この『大空襲三二〇人詩集』を世界中の空襲・空爆による死傷者と、水野広徳、石橋湛山、桐生悠々、宗左近、浜田知章、鳴海英吉、木島始たちに捧ぐ

鈴木 比佐雄

1

アフリカの女性を起源とする遺伝子を持つといわれる人類は、なぜ戦争をし続けて殺し合うのか。それも手を汚さないようにその時代の最高の技術から最悪の兵器を使用して互いを殺しあうのか。二十世紀は科学技術の発達によって桁違いの大量殺戮が可能となった。その大量殺戮が国益の名の下に国家の指導者や軍人に委ねられて、他国の民衆に大きな悲劇をもたらし、今もその危うい選択に晒されている。殺戮は殺戮を呼び、報復の連鎖は二十一世紀まで続いている。空襲・空爆の歴史は、自転車屋だったライト兄弟が一九〇三年に初めての動力飛行機ライトマイヤー号で空中を十二秒間舞ってから、八年後の一九一一年にイタリアがトルコに空爆したことから始まる。イタリアは二隻の飛行船と二十八機の飛行機で爆撃した。それから四十数年で米国のB29エノラ・ゲイは広島に原爆を投下した。弟のオービル・ライトは原爆投下について自分の発明が利用されたと最期まで悔いていたと言われている。そして二〇〇九年の今もアフガンやパレスチナのガザ地区では空爆が続いている。この一〇〇年を超えようとする空襲・空爆の歴史をやめることは出来ないか。人類だけの問題でなく、地球

の環境をこれ以上傷める余裕は無くなってきた。この詩選集は、空襲・空爆下の経験者たち・関係者・後世の者たちが空襲をどのような思いで感受してきたか、その破壊の悲惨さを問い続けることを詩作によって明らかにしようとした試みだ。日本の詩人だけでなく、現時点で可能な限り世界の詩人たちの優れた詩篇を集め、二十一世紀にこれ以上空襲・空爆をさせないような世界にするために、その悲劇の意味を後世に残そうと企画編集したものである。

私が座右の書にしている家永三郎の『戦争責任』（一九八五年刊、岩波書店）の中で、特に心に刻まれている箇所は、元海軍大佐であった水野広徳の非戦論を詳しく論述しているところだ。日本が「統帥権の独立」を盾にして好戦的な政治家や軍部のなすがままにさせていたら、最終的に日米戦争が起きて、東京などの都市は空襲によって焼け野原になり、民衆は最悪の状況に陥ることを予見していた。水野広徳は、十五年戦争に入る二年前の一九二九年十一月八日の朝日新聞紙上で池崎忠孝著『米国怖るゝに足らず』の書評で米国を侮る者達を手厳しく批判した。日米が戦争をしたら、日本は必ずフィリッピンやグアムを占領し、米国艦隊はハワイに進出し緊張状態になる。そして先に手を出したほうが失敗するだろうと予測する。戦争が開始されれば東京とサンフランシスコの空爆が第一目標になる。そして持久戦となり最終的には経済力の差となり、「日本が三年五年の持久戦に耐へ得るや否やの問題である」と結論付ける。そして海上でも地上でも「最愛の人の児をふかの糸食と堀の埋草とにしたに過ぎない」と予言する。実際の歴史は水野広徳の言ったとおり日本海軍の軍艦は海の藻屑と成り果て、東京の隅田川などは同胞の水漬く屍が溢れてしまったのだ。一九三一年の満州事変、一九三二年の上海事変の前に第一次世界大戦の総力戦のデータを踏まえて、このような冷静な論説を語り続けていた水野広徳のような軍事評論家がいながらも拘らず、陸軍・海軍、政治家たち・在野の言論人たちも冷静に耳を傾けなかったことが悲劇を大きくしたのだった。水野広徳の一九三二年に発行した『打開か破滅か 興亡の此一戦』はすぐに発売中止となり、「満州国」関係の部分を伏字にして同年十一月に何とか発売された。そこで米軍の東京大空襲の場面を次のように予告する。「火災は先づ市の東と南とに起つた。やがて北にも、西にも、火の手は三十ヶ所、五十ヶ所に及んだ。避難民雑踏の為に消防ポンプも走れない。先ほどから吹き起つた南東の風は、火を見て益々猛り狂ふて居る。満天を焦がす猛炎、全都を包む烈火。物の焼ける音、人の叫ぶ声、建物の倒れる響。（中略）火災は二昼夜継続し、焼くべきものを焼き尽したる後、自然に消鎮した。跡は唯灰の町、焦土の町、死骸の町である。」このように水野広徳はシミュレーションしたが、歴史は予告したように現実のものとなったのだが、想像を超えた全国規模での空襲や原爆投下が実行されてしまったのだ。

また家永三郎は、一九二一年に『東洋経済新報』主筆の石橋湛山が記した「一切を棄つるの覚悟」を高く評価する。そこ

には日本が「大日本主義の幻想」ととらわれてこのまま破滅の道を歩くのではなく、満州・山東・中国から得たものをすべて捨て、また朝鮮・台湾には自由を許し、日本は世界に先駆けて自由主義を採り、道徳的地位を保つことを提唱している。また『信濃毎日新聞』主筆の桐生悠々は社説で東京大空襲を危惧する記事を十五年戦争勃発時に記している。その意味では、冷静な言論人たちは在野に存在していた。

私は高校時代に新聞の切抜きをしていたが、特に関心のあった記事は、家永三郎の歴史教科書裁判だった。一九七〇年七月に二次訴訟の一審判決が出て家永三郎が勝訴した時だった。「侵略、南京大虐殺、七三一部隊」などの記述を削除させようとする文部省に果敢に論争を挑んだ家永三郎は、私にとって真の歴史認識を守る信念の人であり「教育の自由」を守る英雄のように感じられていた。

「空襲で町は焼け野原だったんだよ」。私は生まれた東京下町の荒川区南千住が焼け野原だったことを祖父母から聞かされて育った。兵士だった父が中国大陸から戻った時に見た焼け野原の光景を語る驚きの口調は、子供心に生々しく心に残っている。百万人が焼け出され十万人が二時間半あまりで死亡した一九四五年三月十日、その前からも小さな空襲があり、さらにその後も何度も続いた大空襲の果てに南千住から浅草や上野までが見通せ、東京の大半が焼け野原になってしまった光景を想像することは、この世の終わりを想像させた。そこに暮らしていた人々ほどのような運命を辿ったのか。浅草国際通りに並べられたあまたの死体から、生き残った者たちが家族や関係者を探し続けることはどんなに壮絶な修羅場だったろう。私は子供の頃に時々浅草まで隅田川に沿って歩いて遊びに行った。途中にある言問橋の袂の東京大空襲犠牲者の碑を通り過ぎる時に、いつもこの場所が最大の悲劇の場所である場所を感じた。また死者に対する言い知れぬ後ろめたさのような思いがこの場所から押し寄せてきて、隅田川の川底からも死者たちの叫び声が聞こえるような思いにとられ、慰霊碑に一礼をしてそそくさと先を急いだものだった。日本が経済的にいかに繁栄しようが、戦時下に空襲によって亡くなった人々のことを忘れてしまうなら、また日本は大きな過ちを繰り返してしまうのではないかという思いは、いつの間にか私の原点になっていた。このような悲劇の原因はいつどこにあったのだろうか。そして報復や憎しみの連鎖を二度と引き起こさないためにはどうしたらいいのかを微力ながら探ってきた。

二〇〇七年三月に『原爆詩一八一人集』の編集作業が開始した時に、編者の長津功三良、山本十四尾、私との三人の間では、かりにこの詩選集の評判が良い成果を得られたら、次には『大空襲詩集』を作ろうという合意があった。長津功三良は、終戦間際に米軍は一八〇もの都市に空爆を計画しその多くを実施したが、広島・長崎はそのうちの二つなので、他の空襲の詩篇も多くが存在し、まだ書かれていないがその時の体験を書き残したい詩人がきつとたくさんいるはずなので、それらを結集したいと語り、山本十四尾もまた、学童疎開の世代なので、空襲が弱い民衆をどんなに苦しめたかを記録し後世に残すべきだと語った。英語版翻訳者のリーダーだった郡山直は、米軍のイラク爆撃に反対し英語でその爆撃に反対する詩集を出しており、世界の詩人たちの空爆に反対する詩を集めたいとも語った。私もまた日本の加害者としての側面を明らかにするため、中国への空爆について書いている中国の詩人など海外の戦中の詩人たちを冒頭に収録すべきだと思い、またベトナム・アフガンの空爆や郡山直と同じようにイラクの空爆など戦後の海外の空襲をテーマにした海外の詩人も出来るだけ集めようと考えていたのだった。そのことについて「被爆していない詩人こそが原爆詩を書くべきだ」という「原爆詩運動」の提唱者でもある浜田知章は、よく空爆や戦略爆撃をやめさせなければ戦争は決して無くならないと語っていた。私たちの中で浜田知章の平和思想である「ヒロシマの哲学」を現実化する詩運動を実践すべきだという考えが大きく影響を与えていたのだった。計画通り八月六日の発行日で『原爆詩一八一人集』は七月半ばには書店にも配本されて、朝日新聞の天声人語をはじめ六十もの新聞・雑誌・ラジオ・BSテレビなどマスコミで紹介された。初版は一カ月半足らずでなくなり二版目を増刷することになった。またその年の十二月には四人の翻訳者（郡山直・水崎野里子・結城文・大山真善美）の協力を得て英語版も翻訳・刊行し、核保有国の駐日大使、国連の責任ある指導者たち、核兵器廃絶を実際に現実化しようとしている詩人・文学者の手元に届けたのだった。翌年の二〇〇八年には、宮沢賢治学会イーハトーブセンターから『原爆詩一八一人集』（日本語版・英語版）の三人の編者が「イーハトーブ賞奨励賞」を授与された。

そのような『原爆詩一八一人集』の成果を踏まえて、二〇〇八年八月に刊行された「コールサック」61号で『大空襲三二〇人詩集』は公募された。半年かけて今回の『三二〇人詩集』は集められた。何名かの詩人は複数の地域に参加しているので延べ人数で三二〇人となっている。「三二〇」とは、もちろん東京大空襲の三月十日を意味しているのだが、国内の空襲だけを取り上げて日本の被害者としての側面を強調しているのではない。後から触れるが、中国の重慶に日本軍が大規模な空爆を五年半も定期的に行ったことを日本人は決して忘れてはならない。ただ原爆以外の空襲で東京大空襲が二時間半あまりで最大の被害である十万人を出したこともあり、大空襲の象徴としてこのようなタイトルとしたのだった。

この詩選集は九章に分かれている。「一章 海外／戦中」で中国の都市への日本軍の空爆を記した詩から始まる。二章から八章は国内を七つの地域に分けて、詩に触れられている空襲の地域で分類されている。東京から始まっているのは、一九四二年の初めての「ドゥリットル空襲」があり、その後も一九四四年から始まる米軍の空襲は東京の住民を皆殺しにし

ようと史上最大の空襲を実行しているからだ。九章は「海外／戦後」で、朝鮮戦争から現在も戦闘が続いているアフガン、イラク・パレスチナの空襲詩まで収録されている。次に各章の詩篇の概略を記しておきたい。その際に空襲の歴史に関して前田哲男「戦略爆撃の思想　ゲルニカ、重慶、広島」（凱風社）から多くの史実を信頼できる資料として引用させていただくこととする。この本は一九八七年に『朝日ジャーナル』に連載されたものがベースになって単行本になり、二〇〇六年には最近の空襲の「9・11事件」「イラク戦争」にまで触れた新訂版が出た。私は浜田知章と親しくなった一九九〇年代にこの本の提起している「戦略爆撃の思想」についてよく話題にして、詩作においてもこの「戦略爆撃」を本格的に取り上げるべきだと話し合っていたのだ。

2

「海外／戦中」には、一九一一年にイタリアがトルコに爆撃したことから始まった空襲の歴史の中で、出来るだけ古い空襲詩を探したが、結果として中国の詩人阿瓏（アーロン）が一九三七年十月に書いた「血の洗礼」（秋吉久紀夫訳）が最も古い詩だった。次に艾青（アイチン）の「雪は中国の大地の上に降っていて」（秋吉久紀夫訳）が十二月に書かれているが、この中国民衆の日本や欧米列国から植民地化された苦悩や悲しみや不屈の精神を見事に汲み上げた詩篇は胸深くに届いてくる。日本は石原莞爾中佐が指揮した「満州事変」（九・一八事変）を一九三一年に引き起こし、同年十月八日に錦州爆撃をおこなった。奉天飛行場から発した一一機の日本製偵察機とフランス製の爆撃機で第一次大戦後に初めて都市爆撃が日本軍によって始まったのだ。また翌年の一九三二年一月の「上海事変」で日本軍は、上海沖三〇キロの海上に進出した空母「加賀」「鳳翔」と水上機母艦「能登呂」から六七機によって上海市街地を無差別爆撃した。その五年後の一九三七年には日本本土の長崎県大村基地から発した「新鋭・九六式陸上攻撃機」（略称　中攻）二〇機によって南京の飛行場周辺に爆弾を投下した。この南京「渡洋爆撃」の成功によって日本は中国で制空権を得て「戦略爆撃」の歴史を中国の民衆を踏みじりながら切り拓いていってしまうのだ。この「戦略爆撃の思想」は一九二二年にイタリアのジュリオ・ドゥーエ陸軍少将が著書「制空権」によって唱えられたと言われている。その中で「鳥を抹殺したければ、飛んでいる鳥を撃ち落とすだけでは足りない。卵と巣が残っている」と言い、交戦員と非交戦員を区別する概念は時代遅れで、今日の戦争は軍隊だけでなく国民全員の総力戦だと予告していた。また、真の攻撃対象は「都市、産業、鉄道、橋」なのだどドゥーエは主張し、一九三〇年代に日本、イタリア、ドイツに始まる都市爆撃を始めとして現実化されていった。イタリアは一九三五年五月にムッソリーニがエチオ

ピア侵略を開始する。五十万人の兵力と三五〇機に達した戦闘機や爆撃機を投入し、「槍で武装し裸足のまま行進するエチオピア兵」を殺戮したと言われている。ドイツも一九三七年四月のスペイン内戦において、ゲルニカにおいて大規模な無差別爆撃をした。ゲルニカに関しては、浜田知章「磔刑図考」、南邦和「ゲルニカ」、浅井薫「ゲルニカ」の三篇が収録された。中国の詩人郭沫若は一九三八年の武漢空襲のころ詩「最も怯懦な者こそ残忍だ」を書いた。武漢が陥落した後に蒋介石をはじめ、抗日のために国共合体の高官たちは重慶を臨時の首都にするため移動する。重慶がその後の一九三八年二月から五年半も日本軍の爆撃が開始されるのだ。当初の爆撃は軍事施設や目標物からだったが、一九三九年五月三日と四日の爆撃は、武漢から九六式陸攻四五機が七八〇キロを飛んで、海軍の大西瀧次郎中将が中心になった歴史上初めて本格的な焼夷弾を使用した都市爆撃が実行された。この二日間で死傷者は六千人を超えたといわれ、四千人が亡くなってしまった。郭沫若は詩「惨目吟——惨状を目にうめく」で日本軍の歴史的な無差別爆撃を記録した。五年半の間に日本軍は重慶に二一八回も爆撃し、一万一八八九人を死亡させた。秋吉久紀夫は、詩「深夜の電話」で日中国交回復直前の一九七〇年代初めに重慶に入った時の無言電話から中国人が重慶爆撃を決して許していないことを伝えている。また村田正夫の詩「重慶」も、サッカー・アジアカップの重慶での試合で日本チームがブーイングされたことで空襲の深層を垣間見せている。この重慶爆撃が日本を世界から孤立させる決定的な要因になったし、後に東京大空襲の指揮をしたカーチス・ルメイ大将は、日本軍の重慶への都市爆撃やドイツのドレスデンやハンブルグにおこなった地域爆撃という無差別爆撃から学び、圧倒的な物量で日本の全ての都市を破壊する報復計画を準備していたのだ。

中国大陸での日本人の空襲で決して忘れてはいけない七三一部隊の細菌兵器の空襲を記している四人の詩人の詩篇も重要だ。木島始が戦後間もなく書いた長編詩「蚤の跳梁」は、七三二部隊の部隊長であった「かれ」（石井四郎陸軍中将）の戦争責任を日本人が決して忘れてはいけない重要な問題として初めて記した。鈴木文子の詩「ねずみの行方」は、地元隣接する埼玉県多くの農家が七三一部隊の実験で使用するねずみの飼育をしていたことから、ねずみから蚤へとペスト菌が移されて細菌兵器になっていったことで、七三一部隊と自分たちも無縁ではないことを提起している。尾花仙朔は広島・長崎の死者たち、七三一部隊が人体実験をした捕虜三千人の死者たちなどを踏まえて、日本・米国など世界の国々が陥った大量虐殺を肯定してしまう狂気性を、仏陀・キリスト・イスラムなどの宗教や哲学と対峙させながら、人間に果たして真の精神性があるのかを鋭く読む者に問うている。山本倫子は、満州で兵士だった夫が中国で七三一部隊の投下しただろうペスト菌に罹って熱湯を飲むことによって生還したことを、夫の世代の貴重な証言として書き記した。これらの日本軍の戦争責任を

少数の詩人たちは誠実に直視しようとしてきたのだ。

森田進の詩「空襲警報は解除されていない」は、東京大空襲を目撃した朝鮮から留学した若者の視線で語られていて、日本人が歴史の真実を直視しなければ、「空襲警報」は永遠に解除されないというアジアの他者の眼差しだ。高畑烈の『長詩リトルボーイ』は、朝鮮人被爆者の視線で日本・米国という二つの国の加害者たちへ、最も被害を被ったのは誰かを問い続けている。

日本の加害者としての面としては、米国への真珠湾攻撃と風船爆弾の詩篇がある。真珠湾の詩篇は新川和江の「真珠湾の水」^{パールベイの水}、池田鍊二の「六十二年前の今日」と水崎野里子「真珠湾攻撃」を、また風船爆弾の詩篇は池田久子「日本の抒情」、川内久栄「いまだに出走する」「唯一の成果」、武藤ゆかり「紙風船」と大崎二郎「紙漉きのわらい」^(一)を収録した。米国を震撼させ、結果として想像を絶する報復を可能とさせた原因であったこれらの行為の意味を深く受け止めねばならないだろう。また久宗陸子の「北回帰線」と真辺博章の「台東の海」は台湾での空襲の詩であり、弓田弓子の「生懸」と入江昭三「贊の貌」^{かお}は大連・満州での空爆の詩篇だった。また宗美津子の「人が火の中に消えた」五篇は、一九四五年八月二十二日にソ連軍から空爆されたことを記した歴史的にも貴重な詩篇だ。

海外の詩篇では、ロンドン空襲を記した英国人デイラン・トマスとイーデス・シットウエル、ドレスデン空襲を記したハインツ・チェホフスキー、フォルカー・ブラウン、ドゥアス・グリューンバインとシュトゥットガルト空襲を記したマリア・キスナーがいる。英国とドイツ報復の連鎖が詩人たちによって残されている。米国の詩人たちは四名が収録されているが、広島・長崎を自己の内面の問題であり、人類の課せられた原罪のように被爆者たちへの深い同情心が秘められていることが読み取れる。ウイリアム・スタフォード、ジェームズ・カーカップは第二次世界大戦中は良心的兵役拒否者だった。現役のテレシнка・ペレイラは八篇、デイヴィッド・クリーガーは五篇を寄稿してくれるほど、広島・長崎について自己の重要なテーマとして実践している詩人たちだ。原爆詩・空襲詩がグローバルな詩の重要なテーマになっていることを改めて確認させられる。

3

「二章 東京」は、当初は「三章 関東」と一緒にしていたが、両方合わすと八〇篇以上もあり、東京大空襲に関する詩と関東の他の空襲詩などの二つに分けて編集した。戦後詩の代表作と誰もが認める宗左近の長編詩「炎える母」から始まり、五十数名の詩篇が収録された。宗左近の「縄文塾」に通っていた私は、目の前で母を焼き殺されてしまい、生涯そのことを背負って詩作を続けている宗左近の反戦思想の底知れぬエネルギーを感じていた。次に浜田知章の「東京下町・薙露行」では、東京大空襲の最大の悲劇の場所である言問橋で死んだ一人の少女のレクイエムである。菊田守の「太白」^{たはく}は、本格的に東京大空襲が始まる前の一九四四年十一月二十四日に東京郊外の中島飛行機武蔵野工場爆撃に向うB29が気まぐれに落とした爆弾によって死亡した近くの子供の死を悼んだ詩だ。福田律郎の長編詩「風」は、恋人を探しに焼け跡に向かい、そこで見た凄まじい光景を描写し、指をもぎとられ火傷を負った「マキコ」への深い愛情を感じさせる詩だ。田中清光「東京大空襲（短縮版）」、斎藤庸一「明けがたの烽火台」、鈴木満「火天」、小森香子「良子ちゃん」など実際の空襲体験者たちがリアリティと心情を込めて書き残している。また体験していないが、家族から聞いたことなどで戦後生まれの詩人たちも挑戦して参加してくれている。

「三章 関東」は、婚約者を亡くした鳴海英吉の横浜大空襲の詩「焼き殺されたふさ子」「五月に死んだ ふさ子のために」から始まる。平塚空襲、水戸空襲、宇都宮空襲、前橋空襲、千葉空襲、熊谷空襲など三十四名の詩篇が収録された。「四章 北海道・東北」は、高村光太郎の詩「非常の時」など十九人の詩篇が収録。「五章 中部」は石川逸子の詩「真紅の服で」など十九名の詩篇が収録。「六章 関西」はたかとう匡子の詩「ヨシコ」など二十四名の詩篇が収録。「七章 中国・四国」は小野十三郎の詩「ひかり」など四十一名が収録。「八章 九州・沖縄」は四十名の詩篇を収録。「九章 海外/戦後」は四十四名の詩篇が収録。

三百十名の詩篇を詳細に論じたい思いがあるが、スペースが限られているので触れられないのが残念だ。今進行中の世界の空襲・空爆に対して、日本の詩人たちは果敢に挑戦している。その志の高さに私はこれからの詩作の希望を垣間見る思いがした。戦前・戦中の日本人の不幸な過ちを反省して日本は戦後生まれ変わったと誇るためには、日本が空襲・空爆に対して加害者でありながら最大の空襲・空爆の被害者を抱えていた国であったことを双方から世界に発信すべきだと編者たちは考えている。日本をはじめ世界の空襲・空爆を真剣に無くしたいと考えている人々にこの詩集を読んでもらいたい。そして、アメリカの先制攻撃論などが反面教師として愚かな選択であったと見なされる空襲・空爆のない世界を一日も早く人類が目指し築いていくことを祈念する。最後に、この一〇〇年の間に空爆・空襲で悲惨な死を遂げられた世界中の被災者達のご冥福を心から祈り、この詩選集を捧げたい。

念願のアンソロジー『大空襲三二〇人詩集』が間もなく出来上がる。膨大なゲラを前に感無量である。総てではないにしても世界中の多くの人たちが、趣旨に賛同し参加してくれている。愚かな神になった人間達の、空爆の歴史と、庶民の悲惨な被害の実相である。世界の真実である。記録し提示することによって自ずから戦争の罪悪が浮かび上がってくるだろう。日本も、この悪の当然に加害者であり、又被害者でもある。ここに多くの考えるべき事がある。この本は、歴史的資産として次の世代へ是非残すべき物だと信じているし、真実の文学遺産として残るだろう。老若男女、多くの人たちに読んで欲しいものである。

私の駄文など不要であるかもしれない。歴史的な仕事の企画段階から、志を同じくするもの達で、一緒に荷物を担いできた、という充実感が有る。

先般編纂刊行した『原爆詩一八一人集』の企画の段階から、既に『大空襲』の企画は出来上がっていた。『大空襲三二〇人詩集』とあるように、三月十日の東京大空襲を意識した表題である。当初の私の考えは東京・横浜・名古屋・大阪・神戸など或る程度ブロック分けて、シリーズ化していったら、という意見だったが、コールサック社の鈴木比佐雄さんは、一挙に世界に拡げ呼びかけて大きな物に纏めよう、ということとその意見に従った。そうして良かったと思う。アンソロジーとしての年代と迫力がより濃密に出たように思う。

小さな歴史の浅い出版社の手がける仕事としては、実に大きな仕事をしたものだと思う。畏友鈴木比佐雄さんの純真ひたむきな馬力と努力には敬服する。彼の存在がなかったらこの本は完成しなかったかもしれない。彼はこの半年間殆ど休んで居ないのではないか……。健康でまた良い仕事をしてくれることを祈る。

どうか皆さん、この本を手にとられて、読み、考え、自分なりに出来ることを実行し、そして次の世代へ継承して行つて下さい。それが、小さな力にしても結集すれば、世界の平和へ繋がる、大きな運動体の原動力になることでしょ。

編者あとがきⅡ 事実の開示こそ明日への道標となる

山本 十四尾

脳髓をたれながしながら歩いてくる人、跨線橋の階段の途中で腰、背中、頭から血を噴きだしている人、駅のホームでは筏のように市井人が連らなって死んでいる。もがきつづけている人らが血の流れに浮いているように見える。

国鉄東北本線小山駅（現JR線・宇都宮線小山駅）の場景は六十年も前のことなのに依然と鮮明に彷彿されてくる。小山駅は水戸への水戸線、高崎への両毛線が分岐する駅で、機関区があった。列車が集結するところを戦闘機が銃撃してきたのだ。疎開児であった私は戦闘機を操縦している青い目を初めて見た。それほど低空での爆撃であった。戦争に直接かわっていない市井人を無差別に殺戮していく、しかもうす笑いながらの銃撃で旋回を繰り返し飛来するアメリカに対し少年の憎しみはいまだくすぶりつづけている。

いまも戦火は世界のあちこちに燃えたぎっている。人間としての理性を没にして、宗教という名の戦闘はつづいている。神が不在の地球にあつて人類は何を道標にして進むべきか、霧が晴れることはない。

それを吹きとばすただひとつの一陣の風になるのが、このたびの『大空襲三二〇人詩集』である。この多様な体験ならびにそれを詩化した文学を国内に外国へと発信することは、悲惨には明日がないことを事実をもって開示することによって、逆説の戦争が無意味であることを示唆するものである。私たちは先きに『原爆詩一八一人集』を刊行し戦争の非生産性をあなたたちと共感を共有できた。

世界中の平和を希む多くの人たちに明日があることを、諦めることなく戦争を否定しつづける言動を継続していくことで実証していきたいと考えている。原爆と同様に戦争体験をも風化させてはならない。

この『大空襲三二〇人詩集』が多くの人々に読まれることを期待するものである。

このアンソロジーの題名『大空襲三二〇人詩集』は一九四五年三月十日の東京大空襲に由来する。一晚のうちに死者推定一〇万人、負傷者約四〇万人といわれている六十四年前の大空襲を記念して三月十日の出版を企画した詩集である。中国、韓国、ブラジル、アメリカ、イギリス、ドイツなど外国の詩人たち、わが国のすでに故人となられた詩人たち、現存の詩人たち、総勢で延べ三百十人の詩人の作品を収集することができた。作品の収集、和訳に協力して下さった方々、遺族の方々、そして参加して下さった詩人の皆さんに感謝したい。コールサック社は核兵器の廃絶を念願して、二〇〇七年に『原爆詩一八一人集』というアンソロジーの日本語版と英語版を出版したが、このたびこのアンソロジーで、無差別爆撃の非人間性、残酷性を告発し、戦争の恐ろしさ、無意味さ、愚かさを考える資料を提供することは、大きな意義がある。このアンソロジーの作品を読んでいると、戦争の恐ろしさ、人間の憎しみの恐ろしさ、皇軍が中国その他の地域で行った戦闘行為の恐ろしさ、米軍が日本本土の都市、町村に対して行った無差別爆撃、広島、長崎の原爆投下の恐ろしさ、に驚愕する。われわれは今こそ戦争の非人間性、恐ろしさ、無意味さに思いをいたし、戦争のない平和な世界の構築を求めて、その実現に尽力すべき時代だと思う。

米軍の日本本土の無差別爆撃はたしかに残酷なものであったのだが、わが日本軍は一九三九年五月にすでに中国の重慶に無差別爆撃を行ったのである。その惨状は郭沫若の「慘目吟」に描写されている。多くの作品に言及することはできないが、鈴木文子さんの「ネズミの行方」は胸を突く。七三一部隊のペストノミを生産するためのネズミ飼育が埼玉県東部地区で盛んにおこなわれていたことを知り、啞然とした。われわれ日本人は、日中戦争中、対英米戦争中、アジアにおいてどんな残酷なことをしてきたのかを知り深く反省し、詫びるべきである。歴史的事実に対する反省と謝罪があつてこそ真の友好的日中関係、ひいては世界平和に貢献できるのだと思う。

戦争、空襲のない世界、核兵器のない世界を実現することこそ人類が生き残る唯一の道だ、ということをも人間一人一人が悟るべき時代が来ているのだと思う。

二〇〇一年九月十一日の同時多発テロ事件、二〇〇三年三月二十日ブッシュが始めた愚かなイラク戦争で、二十一世紀は暴力の暴発で始まったが、今こそ人類は、国連中心の平和世界を目指して、戦争と核兵器の廃絶に努力すべきだと信じる。そして砂漠の緑化、CO₂削減、地球温暖化の阻止、貧困の絶滅、などなどの諸問題に取り組みべきだ、と思う。

作品の一篇、一篇のなかに、われわれは空襲の恐ろしさ、戦争中の人間の非人間性、冷酷さが読み取れる。そしてこのアンソロジーに参加した内外の詩人たちの平和を願う祈りが聞こえてくる。このアンソロジーが広く読まれて、世界平和への運動がますます大きく強力なものになることを願う次第だ。

二〇〇九年二月